

南城の聖地・名所

a.タマグスクの丘	3
b.玉城海岸の聖地	25
c.久高・知念の聖地	45
d.大里城跡・馬天御嶽・佐敷上グスク	62



タマグスク
の内側から
外を見る

2007年2月にスタートしたブログ「田舎暮らし・人生創造・浅野誠」は、ブログ容量を大幅に超過するために、古い記事から削除している。しかし、そのまま消すには「もったいない」記事がある。そうした記事をテーマごとに編集し、本ホームページに掲載することにした。

※ なお、同様に、削除した記事をもとに『写真集 沖縄田舎暮らし自然に包まれて』を電子出版した。(発売元 Nansei 2012年2月刊行) 購入希望の方は、次にアクセスしてください (価格350円) [写真集 沖縄田舎暮らし 自然につつまれて](#)

今回の「シリーズ南城物語 1 南城の聖地・名所」は、本ホームページ掲載の第一回のものだ。「シリーズ南城物語」は当面5回続きの予定だ。

ところで、南城になじみが薄い客が来ると、どこかの聖地を案内することが多い。案内するだけでなく、私たちだけで、あるいは一人で訪問することもしばしばだ。名の知られた聖地はほとんど行ったつもりだが、「ここにもある」と偶然気付くことさえある。市内には、何百どころか、何千という数の聖地があるのだろう。

聖地には、斎場御嶽のように、王家の手厚い保護・管理下にあったものから、王家との関わりは薄く、シマ(ムラ・共同体)によって支えられているものまで様々だ。両者が微妙に絡み合い、矛盾関係が隠されていると聞くものもある。そういうことも、私の関心ごとの一つだ。

よく知られた聖地以外に人々が暮らしのなかで支え、祈ってきたものが多い。私が住むシマ(玉城字中山)にも多そうだが、私にはよく分からないものがほとんどだ。

そうした生活のなかで生み出されてきた聖地を大切にしていきたい、と思う。そのために、由来を知る人から伝え聞いておくことも大切だ。なかには、戦争で破壊されたままのものも多く、知る人が少なくなっているからだ。南城市史編纂事業が、現在これらを対象にして作業を進めていると聞く。成果刊行が待ち遠しい。

富里から摩文仁方向を見る



a. タマグスクの丘

私の家がある字中山は、旧名を仲栄真といい、昭和時代に『中山』と呼ぶようになった。近世半ばに、隣のシマ玉城を分けて、西半分を仲栄真とした。その玉城と仲栄真とした、現在の集落地を上ったところにタマグスクがある。

写真は、グスク内側から北側のゴルフ場方向をのぞんだもの



そのタマグスクの横を東西にグスクロードが走っている。ロードの北側は、琉球ゴルフコースだ。1972年以前は米軍基地だった。その地番の一部には中山もある。だから、タマグスクは、中山にとっても地元感覚に近い。



私がここを初めて訪れたのは、かなり以前だが、いつだか忘れた。しかし、中山に住むようになってからは、年に1, 2回訪れる。7, 8年前は、まだ整備過程にあっただので、上り道は草が生い茂り、岩がごろごろの感じだったが、近年整備作業が進み、2010年には木製の階段まで取り付けられて、とても上りやすくなった。

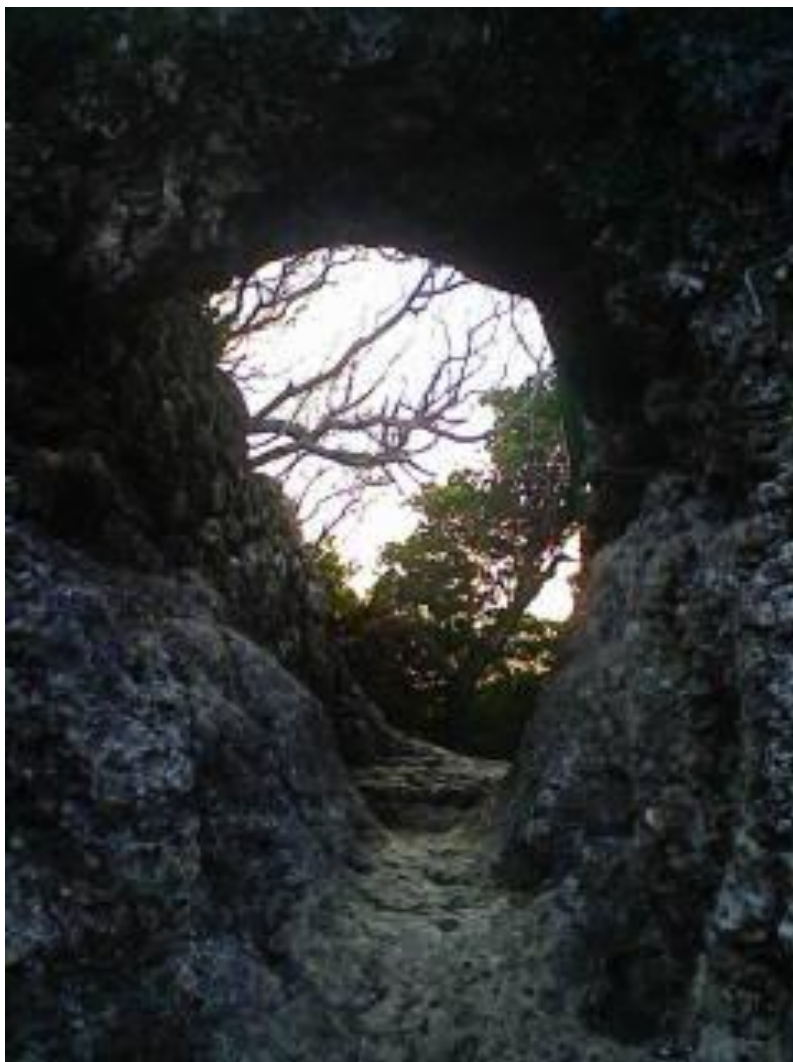
写真は、タマグスクの内から、北の方向の外側を見る。ゴルフ場が見える。

夏至の太陽は、この角度から昇る。



外側から内側を見る。

冬至の太陽は、この方向に沈む



タマグスク周辺

私たちは、海辺への散策することが普通だが、時々丘（山？）の方にも行く。

百名のカチャ原から、玉城少年自然の家のウォークラリーコースに沿って歩く道を紹介しよう。

所々に案内看板があるので、間違えることはない。危険箇所にはロープが張られていたりしているので、安心だ。それでも、小学校低学年までは無理なコースだ。

我が家から徒歩十数分にある入口は、上水道の配水施設の横だ。

コースは、すぐに全くの山道。途中に立派なガジュマルがある。





入口から数分で、自然の家の入口に着く。写真の道の奥の白いところが、自然の家の広場。

そこにいく直前に、左に折れるコースを進む。

森(ジャングル?)の中を進む。ヤンバルの山道と変わらない。南部にもこんなところがあることは意外に知られていない。

山道を歩くのは通常大変だが、ここはウォークラリーに使われているためか苦労は少ない。

でも、この後、大変な個所が待っているとは、その時は気付かなかった。





ところどころ、ガジュマルの大木が歓迎する。

そして、突然開ける見晴らし。写真の下方の木々の間のビニールハウスの手前には、我が家が写っている。ズームアップしているのですが、実際は、これより小さく見えるが。





さらに進むと、トンネルガ
ジュマルがある。風情を感じ
る。

さらに進むと、激しい上り下りがある。それに大
きな岩肌、足元は岩のかけらがゴロゴロしている。

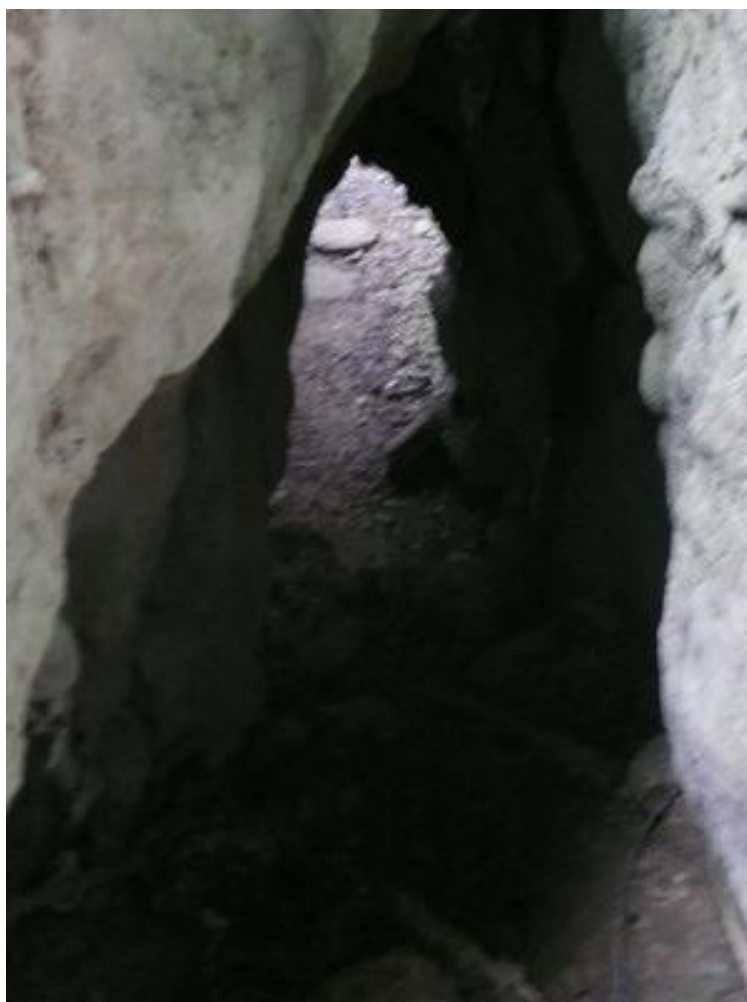




そして、岩場から下っていくと、穴のなかに入っていく。一人だったら怖くて引返しただろう。

穴に入ると暗い。なかには、拝所がある。暗くて写真には写らない。

祈る。





穴から出ると、玉城王の墓がある。14世紀、実在か伝説か、両者が入り混ざった王である。

線香などが置かれているので、拝みに来る人が結構いるのだろう。

聖地の気を感じさせる場だ。

玉城王の墓を抜けても岩場は続く。張られたロープを伝わなければ、登りにくいところさえある。

道の横には、
巨大な岩がそ
びえる。





途中に、ハンモックのようになった巨木の根がある。数人は、中に入れそう。根のまわりにあった土が崩されて、根だけが残ったのだろう。

急坂をロープ伝いに登ると、見慣れた光景が目に入る。タマグスクに上る木製階段だ。ここに出るとは、驚いた。こちら側には、入り口の目印はない。だから、『知る人ぞ知る』場なのだろう。

このコースは、急峻であるだけでなく、聖なるものを強く感じる場なので、しばしば訪れる所ではない。





仲村渠樋川

タマグスクからグスクロードを東に1キロほど行き、県道に突き当たるあたりが字仲村渠であり、すぐ隣に字垣花がある。ここにも聖地・名所が多い。



まず仲村渠樋川（なかんだかりヒージャー）。数百メートルも離れていないところにある垣花樋川ほど知られてはいないが、なかなかのところだ。

左写真が、今も水が出ているところ



共同浴場があったところ。
今も五右衛門風呂が置か
れている。

垣花樋川 (かきのはなヒージャー)

大雨後で水量が多い。





垣花グスク

説明板には、この城の由来などには不明な点が多いとのこと。そんなこともあってか、訪問する人は大変少ないようだ。復元工事などもなされていない。それだけに、古いグスクがそのまま残さ



れ、木々が生き茂り、雰囲気はとてもいい。一人で入るのが怖く感じられるほどだ。

斎場御嶽などのように、人で賑わうのとは好対照だ。自然と歴史の雰囲気を味わうのなら、絶好だ。



古城の雰囲気。

野面積の石垣が迫る。

余談

ミーガー（新川）

2007年7月30日 恵美子と二人で、近くの琉球ゴルフ倶楽部内にある、ミーガー（新川）に御願にでかける。ここは、700年も前から歴史的に著名なところである。知人にすすめられていった。戦前は近くに人が住んでいたが、戦後米軍情報部隊の基地になり、復帰後、ゴルフ場になった。

人々の大切な御願の場ということで、無料で、係員が案内してくれた。

水が豊富にわき出るガマである。掲載できるような写真がとれなかったのが残念だ。



富里・グスクロード公園あたり

グスクロードより、丘を少し下った中腹を東西に旧道が走る。字玉城と字富里を結ぶ。その半ばごろが私の住む中山だ。

その我が家から旧道→富里→グスクロード→坂道を通して、我が家に戻るコースを歩む。私の歩数計つき携帯で測定すると 7000 歩で、約 5 キロだ。起伏が激しく、三分の一は坂道。しかも急坂が多い。平坦な道に換算すると、10 キロほどの感じで、ほぼ 2 時間。

まず中山と富里の境目あたりから海方向の写真を撮る。上の写真は、南方方向。

右の写真は南南東のサチバルあたり。新ホテル「百名伽藍」が見える。



私の大好きな「鳥のくちばし岩」あたり。



富里に入り、御嶽に入る。由緒にただならぬものを感じる。





御嶽手前のカー



富里の御嶽のまわりは鬱蒼としている。

御嶽の横の通路

通路を進んでいくと、突然、コンクリートの玉城運動公園の駐車場があらわれる。

雰囲気ガラッと変わってしまう。



その陸上競技場に隣接して、百十踏揚（ももとふみあがり）の墓がある。百十踏揚と弟の墓が並んでいる。



墓のまわりを、あさぎまだらが飛んでいた。



おもとふみあがりの墓を後にして、再び富里公民館前広場へ。そこから、坂を昇る。集落を抜けて、サトウキビ畑や原野を通り、グスクロード公園への階段道入り口に着く。

そこからグスクロード公園への階段道へ。

グスクロード公園すべりだいから太平洋を見る。すべりだいが古くなって滑らないのが残念だ。

グスクロード公園は、しばしば来る。親子連れの子どもたちが多いが、年配の人も多い。グランドゴルフをカップルでしている方も見かけた。

私も、かつては孫などの幼児連れが多かったが、最近では色々な折に訪れる。しかし、散策だけで来るのは減多になかった。かなり急な坂上り下りがあるからだ。でも、散策に、気分転換だけでなく体力づくり要素を含ませるようになってきたので、今後多くなりそうだ。無論、暑い夏場は無理だろう。

ここは、大木が多く、日差し



を避けられるのがいい。

公園から、東のタマグスク方向へグスクロードを300メートルほど行くと、下へ降りる道がある。農道というべきか山道というべきか、一応舗装されている。しかし、我々地元民以外の方は、下りていくのを躊躇しそうだ。玉城少年自然の家のウォークラリーコースに入っている。

写真は、その途中の道。ここは、年2回ある字中山の共同作業で草刈りをする。



その途中で見晴らしが開ける場所がある。中山の門中墓がいくつかあるところの近くだ。そこから我が家が見える。下の写真がそうだ。中央が我が家。

今紹介した道を少し外れるが、富里には、尚泰久王の墓など、第一尚王朝とゆかりのある旧跡が多い。

2008年に、その巨岩が割れて、国道331号線が通行止めになった。写真画面上部だが、割れ目から青空がのぞいている。岩の向こう側が尚泰久王の墓だから、大変な工事だ。



1年がかりで修復工事が進行し、割れた巨岩に接する尚泰久王の墓も写真のように修復される。





南城市役所近くには、字當山の番所ヌカーがある。

王朝時代の玉城間切の「役所」である番所の川・
水源だ。

このあたりには、あちこちにカーがある。



b. 玉城海岸の聖地

濱川御嶽

我が家から海岸沿いに東に30分歩むと、有名な濱川御嶽・ヤハラヅカサに至る。

上の写真は、2011年1月2日に「初詣」した濱川御嶽。ここは年に数回は訪れる。



下の写真は、濱川御嶽の向いの巨岩だ。

左の写真は、その岩の上。潮花司（スーパーナツカサ）というそうだ。私にとっては最高のスピリチュアルなところで、何かを感じる。





ヤハラヅカサ

濱川御嶽から前ページ写真の巨岩の横を通過して、海岸に下りるとヤハラヅカサがある。

上の写真では、手前から、ヤハラヅカサ、コマカ島、久高島と、一直線に並んでいる。

ヤハラヅカサのてっぺんのすぐ上がコマカ島。

左は別の日の風景

大潮干潮の時は、ヤハラズカサも、
陸上になる。



大潮満潮の時は、ほ
んの少しだけ顔を出す

周辺散策中のある時、琉球大学を退官された著名な海洋地質学専門の木村先生一行と出会う。木村先生の説では、ヤハラヅカサは、環状列石だとのこと。写真右のヤハラヅカサを含めた4つの石が、その一部だとのこと。

環状列石とは、考古学的遺物のストーンサークルのことだ。海岸の砂浜を掘ってみれば、はっきりしたことがわかるかもしれないとのこと



写真左のヤハラヅカサ横の岩も、まっすぐなので、人工的に切断した岩ではないかとのこと。

ヤハラヅカサあたりには、二？千年前の人工物の痕跡が多い、とのことだ。

写真は、藪薩御嶽と濱川御嶽を百名ビーチから見たところ。丘の上の森のなかに藪薩御嶽がある。

写真では直接みえないが、中央の岩を向こう側が濱川御嶽



中央やや右に見えるヤハラヅカサに向かって、どこかの門中だろうか、数十名の方々がお祈りをしておられた。寒いのに、海藻が青々としている。



濱川御嶽近くの建物から百名に上っていく道の横に、写真のような崖墓がある。古い歴史だろう。近くには貝塚もある。詳しいことは知らない。



濱川御嶽の上の森には、藪薩御嶽がある。百名市営住宅やカフェやぶさちの前の広場から入る。藪薩御嶽のすぐ近くに、展望場がある。この場所は展望に絶好だが、知られていない。

左はその展望場から撮った写真で、手前のアージ島、向こうのアドキ島を見る。久高がかすかに見える。

受水走水

濱川御嶽から海岸から少し離れた道路を西へ数百m歩いたところにある受水走水。

写真は受水で、手前が御穂田（ミーフード）。

御穂田は、沖縄での稲作発祥の地と伝えられている。今でも地元の仲村渠が稲作行事を受け継いでいる。写真は、収穫期前だ。



左写真は走水。

受水走水の横から、上方にあるカフェのすぐ南側に出る散策路がある。南城市に合併する直前の玉城村時代に作られた。

亜熱帯の森は、島尻でも見られる。戦争で破壊された後、復活してきた森だから60数年の歴史だろう。なかなかいいので、時々散策する。女性ひとりだと、ちょっと怖くなる感じだ。

この周辺のところどころに「受水走水散策路」という案内表示があるが、それを見て、このコースを見つけ歩くのは至難の業だ。だから「知る人ぞ知る」のコースになっている。

森の中をくぐり抜けると、森林浴気分になれる。10分くらいの距離。

※ 後日 孫を連れて散策。元気者の一人が先に行って、道を間違え「ジャングル」のなかに入り込む。どこにいったのか、と思っていると、泣きながら「ヘビ」といって戻ってくる。ヒヤッとするとともに、ほっとした。ハブかどうかはわからない。用心用心。



ヤハラヅカサから西にある長い砂浜が百名ビーチだ。施設も何もないが、それだからこそ美しいともいえよう。

右の写真の砂浜の向こう側には、左から藪薩、濱川、アージ島、ヤハラヅカサ、アドゥキ島が見えるが、さらに右にはコマカ島、久高島がある。

百名ビーチの西端の岩からさらに西には新原ビーチがある。



ヤハラヅカサの東隣は、アージ島。東側の字志喜屋から海岸沿いに行けば、すぐだ。志喜屋とアージ島の間に玉城と知念のかつての境界がある。百名給油所近くの旧国道331号線から入ってくるのが、一番便利なようだ。

島は個人所有とのことだ。知人が、ここでの会合に参加したと話していた。

島と言っても、陸から10メートルも離れていず、橋がかかっている。





橋のあたりから、ヤハラヅカサ方面が美しく見える。

海岸におりて、ヤハラヅカサ方面に少し近づいて撮影。

下はズームアップしてとった写真で、陸と岩の間にヤハラヅカサの石が見える。



吉成直樹・福寛美『琉球王国誕生』（2007年森話社）には、玉城に触れている個所がいくつかある。

「玉城に『藪薩』の聖地が存在するということは、対馬、壱岐、松浦地方や九州西・南部などを拠点にしていた倭寇集団が流入したことを示すと考えられる。今帰仁と玉城はともに倭寇勢力との結びつきを想定することができ、第二尚氏の成立直前の時代とは、そうした勢力が割拠していた時代なのである。」 P79

(仲松弥秀は)「こうした渡来者の中で、良港を控え、海上はるかに展望の利く場所に拠った者が次第に優位に立っていったとし、今帰仁、座喜味、勝連、中城、大里、佐敷、南山、首里、浦添をあげる(中略)。」 p 126

「佐敷、浦添、今帰仁、玉城などに石鍋が導入されたのが十一～十二世紀頃のことであり、そうした土地の勢力が第二尚氏の成立にいたる十五世紀の半ば以降にいたるまで勢力を保持していたことを考えると、この時期の外来者の渡島とともに、十一～十二世紀に定着した人々たちの系譜を引く者、あるいは地位や権益を継承した者たちが、グスクを大型化し、水田稲作を拡大させたと考えられるべきであるように思う。」 P143

『おもろさうし』のなかで沖縄島南部に位置する玉城グスクの玉城按司は『浮雲』という名を持つ(中略)。」この『浮雲』もまた、玉城按司が『水の王』であることを表現する。浮雲である玉城按司は玉城天頂(あまつづ)で、実際に雨乞いをする(中略)。」 P94

加えて、第一尚氏の最後のものたちは、玉城の富里や當山へと「落ち延びて」きたが、そこに尚泰久王を含めたかれらの墓がつくられている。

以上の指摘が正しいとすれば、玉城がかなりの人口を擁する集落群を形成しはじめる11世紀以降の様子をかなりの程度イメージできるように思う。

この他にも、近年進展著しい研究成果を総合して理解していくなら、玉城の「島はじめ」のイメージをかなりつくりあげていくことができるだろう。

右写真は藪薩の展望場から、太平洋とイノーを見る。右下の海岸近くの石が環状にあるところがヤハラヅカサ。

写真にうつる水路を通過して、1000



年近く前に、「アマミキヨ」一行が、この地に上陸したのが事実としたら、濱川御嶽周辺で、最初の晩を過ごした光景を思い浮かべるのもいい。そして、さらに次のような問いかけをしながら、想像を膨らませることは許されることだろう。

受水走水の三穂田での水田稲作をどのようにやっていったのか。

それ以前からの住人はいたのか。いたなら、どのような関係を取り結んだのか。

そして、300年ほど経て、タマグスクを築くほどの人口を抱え、一大勢力になるころの情景を想像してみるのも興味深いことだ。

この「港」は、海外交易の重要な拠点であっただろう。

そして、ここが港の機能を失っていくのは、いつのころだろうか。

ペリー艦隊が沖縄にきたおり、このあたりの港の可能性について調査にきているが、その時の状況は？

1000年前よりもっと前、先に紹介した崖墓近くの百名貝塚を残した人々の暮らしぶりはどうだったろうか。漁猟が食糧のかなりの部分を占めていたようだが、どんな漁業だったのだろうか。

こんな風に推理していくと、興味津々だ。

そして、未来のある時点、たとえば50年後には、どうなっているのだろうか。

新原・百名

話を、百名ビーチあたりから、我が家がある西方向へと進めよう

我が家がある中山から東は、字玉城、字新原となるが、字新原は字百名の分村で、海辺の集落だ。その百名には、字発行で「根国ひゃくな——拝所の由来と御願」という本がある。



拝所といっても、御嶽・カー（泉）・殿など種々だが、各々が固有の歴史を持っている。しばしば拝所は一律に「古い」ものといって、そのまま受け入れたり、あるいは拒否したりしがちである。そうではなく、過去を継承しつつ現在を形成し、そして未来を創造する営みと結びつく必要がある。拝所は歴史の創造物であるから、現在から未来にかけて、それらをいかに継承し創造するかが重要だ。たとえば、生活・生産と結びついたものが、現在と未来の生活・生産とはどう結びついていくのか、が問われてくるだろう。

上の写真の拝所も、その一つだろう。新原ビーチの西端に、干潮時にあらわれる小さな拝所だ。由来などは知らないが、興味をそそる。

字玉城と字新原の境目で、岬の先端にあたる場所をサチバルという。「先の原」という意味だろうが、なぜか「幸福の原」というイメージと結びついてしまう。写真は、イノーから、夕陽に輝くサチバルを撮影したものだ。中央左側が浜辺の茶屋。中央右側に個性的な家々が並ぶ。





サチバルの丘の上に、「赤い瓦の家」が立てられた。そこから見渡す景観も絶景だ。

上の写真は建物の縁側から見た太平洋。左側に奥武島が写る。



建物によりそう巨大ガ
ジマル

奥武島

我が家の眼前にある島が奥武島だ。我が家から海岸を西方向に徒歩10分で奥武島にわた



る橋になる。我が家建築中にしばらく奥武島に住んでいたこともあって、いろいろなつながりがある。



一時在住地のすぐ近くにあるのが奥武島龍宮だ。ここに立つと、南南東方向の沖にニライカナイがあると思ってしまう。

ここで汲んできた海水を、我が家の風呂に入れることもある。海水風呂だ。それにティートリーやレモングラスなどのハーブを煮出したものを加えれば、贅沢なハーブ塩風呂となる。

写真の左に
うっすらと見
えるのが久高
島

奥武島のグ
ラスボートは、
ここから50
メートルぐら
いにあるサン
ゴ礁の魚を見
に来る。



ここに観光客はこない。地元の知る人だけがウガンにくる。



写真には、朝、ウガ
ンをした時の塩がそ
のままある。

写真は、いずれも静かな海だ。
しかし、風が強い時、とくに台風接
近時は、ここは荒々しい叫びをすぐ
近くで聞く。

海の表情は、神の表情だと思う人
もいそうだ。





奥武島の火立て（昔の灯台）跡。以前から、ここに拝所があることは知っていたが、
 どのような由来かわからなかった。最近、由
 来を書いた看板がたてられた。写真の左下
 に写っているものだ。奥に写っている大き
 な石を積み重ねた上で、火を炊いて、沖を
 通る船の目印にしたなどと書かれている。

夕陽に映える奥武島。快晴の日。

中山の畑の向こうに海があり、その
 向こうが奥武島だ。

右端は摩文仁。

我が家のベランダからの景観。



「玉城案内」

ここで、我が家を訪問された千葉大学の「旅」授業の皆さんのために作成したプリントを紹介しよう。(2009年11月作成)

1. 自然・景観 亜熱帯 台風 サンゴ礁 植物 動物 ガマ (鍾乳洞)

星 風 景観展望地 (グスクロード公園など)

太平洋に面した海岸 百名、新原、玉城、中山

2. スピリチュアリティ ニライカナイ 自然のなかの祈り

墓 シマの御嶽・トウン (ウガンジョ)

タマグスク 奥武島 竜宮 (ニライカナイ遥拝) ヤハラヅカサ・浜川御嶽

3. 歴史と民話

1 万年以上前 港川原人 武芸洞 1000 年前 ヤハラヅカサ・浜川御嶽

600~700 年前 タマグスク 400 年前 王朝と薩摩

135 年前 ウチナーグチとヤマトグチ 65 年前 日本軍 生死 米軍統治

37 年前 「復帰」

4. 文化芸能 歌三線 村芸能 棒 (エイサー)

5. 産業・経済・所得

第一次—第二次—第三次 県民所得 地域起こし

基地と補助金依存経済 観光 滞在体験型 富裕層向け

6. 政治 沖縄自立

7. 移民・移住 沖縄から海外・本土へ 本土から沖縄へ

8. 生活・衣食住

9. 教育と文化 ウチナーグチとヤマトグチ

10. 人々のつながり

シマ (ムラ) 門中 学校・会社 友人・仲間



c. 久高・知念の聖地

久高島

久高は、船で渡らなくてはならないから、頻繁にはいけないが、それでも年1～2回赴く。

上の写真は、知念岬近くの「がんじゅう駅」から撮影した久高遠景。

下は、シマーシの浜。久高に住みはじめた人々は、この浜の豊かな水産物とともに生きてたろう。

このあたりには貝塚があるとのこと。玉城の百名との関係も深いとのこと。





聖なる石

これを基点にして、久高はつくられていったという。

この日、回った聖地では、なぜか動物によく出会う。この入り口ではへびに。別の聖地では、巨大な蟹。そしておおごまだら。猫にもあったが少々興ざめか。

福木並木

クボー近くの海岸沿いに、立派な福木並木がある。

太い幹だが、防風林を兼ねており、よく見かけるまっすぐ伸びるものとはイメージが異なる。耐えてきた強さを感じる。





意する必要があると考えてきた。

そして、首里王府支配以前の人々の暮らしのなかから生み出されてきた聖なるものとのかかわりとしての神事を大切にする必要がある。そこにはおそらく首里王府によって排除された神・聖地があるのではないかと、かねてから勝手に主張してきた。

最近、そんな私の考えに似た考えを持ち、私とは比べようもなく真剣に追求している方、お二人に出会った。そのうちお一人は、もともと久高の人で、久高島に八光舎（上の写真）という祈りの場を営んでおられる。

その方に、久高の聖地めぐりを案内していただいたが、その際案内されたのは、全体の50分の1ぐらいです、と言われた。それらに興味津々であるとともに、興味関心を越えた深くて広い世界があることがうかがいしれた。

右写真は、八光舎のガジマル。



私は、ほぼ20年前にイザイホーの映画を見ることがあったが、その映画はイザイホーを古代のとても素晴らしいものとして紹介していた。そうした面をもつのだが、と同時に、首里王府の神支配体系のなかに位置づけられてもきた。そうしたなかのイザイホーと言う面にも留

右は、海岸近くにある瞑想の石



瞑想の石がある場から太平洋を臨む



久高最初の農耕地ハタス

知人で映画づくりを専門とする須藤義人さんが、「久高オデッセイ」（晃洋書房2011年）を出版した。その本について、私は2011年10月に次のようなメモをブログに記した。



サブタイトルは「遙かな記録の旅」であり、映画「久高オデッセイ 第一部」「久高オデッセイ 第二部 生章」の記録作業を綴った本である。

本の帯で、梅原猛は、「この書は、比嘉康雄氏の遺志を受け継ぎ、神々に憑かれた大重潤一郎氏が神の島の映画を撮った感動的な記録である。」と書く。

著者須藤義人は、大重潤一郎監督のもとで本映画製作に助監督としてかかわってきた。文を読んでいくと、監督と一心同体ではないか、とさえ感じることもあるほどだ。また、沖縄大学教員でもあり、私も存じ上げる。いつか、久高に向かうフェリーで偶然一緒になり、本映画のことを聞いた記憶がよみがえってきた。

久高をイザイホーに焦点化してとらえ、それが「日本の原型だ」といい、イザイホーが絶えて30年余りがたつ今、関心を薄める人がいる。私はかねてから、イザイホーは琉球王朝が作り上げ、支配と結びついたものだ、だから、支配と結びつかない世界こそが重要だ、と語ってきた。

その私の主張と重なるものが、本書に続出するのに驚いた。というより、私より先に、このことを課題とし、地道に取り組んでこられた方々が、久高内外におられることを知り、尊敬以上のものを感じた。

そんなことを書いた個所をいくつか紹介しよう。

本土から久高を訪問した若い女性と大重潤一郎との会話

「女は言い出した。

「イザイホーは復活しないんですか。移住して手伝うことがあれば……」(中略)

「イサイホーは無くてもいいんだよ」

女は一瞬の沈黙の後で、「え、どうして？」と聞き返した。

「イザイホーはお金持ちの、琉球王朝の祭りなんだよ。人々の民衆の祭は今も根付いているんだ。それがあるから別にいいんだ」と、泡盛の入ったグラスを飲み干した。

その言葉は若い女にとって、もの凄く衝撃的な言葉であった。

久高島と言えば、イザイホーという祭り。

そのイメージで埋め尽くされた島の姿。艶やかな映像や写真を流す、マスコミが創造した幻想でもあった。しかし逆に、女は安堵したようであった。本当に日常生活の中で息づく、久高の原風景を掘り起こそうという、その男の眼差しを受け止めたのであった。

初老の男は、熱く語り始めた。(中略)

「僕の立場からすると、まず……。僕自身の映画を、ドキュメンタリーを、作るつもりで久高島にいるのだけど、ホンマはエネルギーの大半は、久高島を元気にするっ、ちゅうことに傾けている。

(以下略)」P 2～3

強烈な印象を与える。

ところで、大重潤一郎は、私と生年が同じだ。読んでいると、どこか共通する世界をふっと感じる時がある。

そんな個所として、首里王府との関わりでの祭祀と久高由来の祭祀とについての記述を紹介しよう。

「琉球弧の祭祀は、表面上は首里王府の影響を受けている。とくに久高島の場合は、その影響ははかり知れない。確かに、ノロが配置されたり、祭祀の形式は王府の影響を受けている。

しかし、その下にある中身をみると神々や神観念、世界観や他界観は古来からのものであることに気づく。その古層に繋がるものの上に、首里王府の影響を受けて、形式化していくという段階があったのだ。

久高島ほどではないが、宮古島の狩俣も、首里王府の影響を受けている。人頭税などで搾取される対象であったから、致し方ないことではある。だが、それは表面上の話であって、その基層部分

には古代が息づいているはずであった。」 P 1 2 6 ~ 7

久高由来の「古層に繋がるもの」については、人々の生活と結びついているということで、次のように書かれている。

「大重は、久高人たちに希望を託している。

「久高島というのは、自然がまだ残されている、やっぱり、あの自然の有り様、あれは全部聖地とか言ってるけど、結局、先祖がね、生活した場所だからね。

生活した場所というのは、遺跡じゃないんだよ。先祖の魂がおわします場所だった。

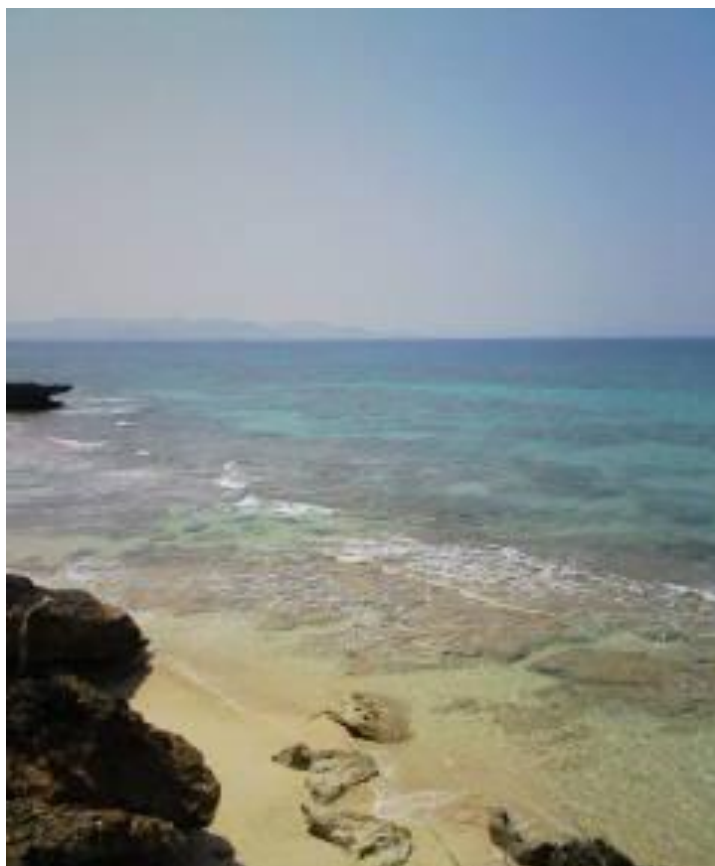
そういう意味で、あの自然に囲まれているということは、実は神に見守られていると解釈してもいい。そういうことを徹底して、本当に久高人たちは心の根の中に持っているから、安心だ。

日々太陽に拝み、夕方、夕日に感謝する。そういう行為は、宗教じゃない。日常の自然信仰なんだよ。

これは世界共通のことだ。自然信仰においては世界中すべて一緒だよ。

そういう意味で、自然信仰は不変であり、久高島の抱えているものも不変であると、希望を持っているよ」 P 5 0 ~ 1

ヤグルカーから本島を眺める



「僕たちは、御嶽を貝塚とか、遺跡として考えてしまう。だが、島の人々は、そこに「祖先たちがいる」「魂がいる」と認識している。

そういう世界観が、祭祀を通して表現されるわけである。このような古層の精神性が、広い遠浅の海を背景に、かたちになって見える。それは、琉球弧全体にも言える。遠浅の海の広いところは必ず、古代集落があり、貝塚が発見されている。

比嘉さんは、「魚介類採集時代から首里王府の時代までの記憶は、久高島というひとつの空間に刻み込まれているのだった」と言いきる。」 P 1 2 8

私が住んでいる玉城海岸沿いにも、貝塚を始め人々の生活跡が多くあり、「史跡」とされているものも多い。そして、久高が、玉城と深い関係がある物語が、語り継がれている。それは、久高の「ムトゥヤ制」（元家制）ともかかわりがあるろう。

「研究者たちは、久高島の神女組織がなくなった後、元々あった血縁中心の「ムトゥヤ制」（元家制）に回帰していこうとするのか……。あるいは別な道筋をたどっていくのか・・・と、動向を見守っている。

だが、僕たちは、あるがままの姿を記録するしかない。「イザイホー」が存続してほしいという気持ちは、意味のない希望にしか思えてならない。琉球王朝がすでに滅びているのに、それを支えた神女組織を維持する「ノロ制度」だけが残ることには、違和感がある。無理して「ノロ制度」を守っていく大義が、まったく見出せないのだ。

このような中で、「大里家」を守る真栄田ナエさんや、「イチャリグワァー」を守る糸数マサエさんは、毎日、ムトゥヤ（元家）へとお茶を捧げ、線香をあげ、祈りを欠かさない。

琉球王府ができる前から存在し、島の暮らしの基本となっていたのが、「ムトゥヤ制」であった。草分けの家であったムトゥヤ（元家）は、「大里家」と「イチャリグワァー」の二軒ある。その家筋を継ぎ、守る女性は、祭祀でも特別な存在であった。」 P 1 5 5

「イザイホーがはじまる琉球王府以前から、島の暮らしの基本となっていた「ムトゥヤ」（元家）を継ぐことで、〈新たな神女〉が出てきたのだった。五〇〇年つづいた「イザイホー」を中心とした「ノロ制度」から、根源的な「ムトゥヤ制」に回帰していこうとする流れかもしれなかった。

月明かりの下で、内間豊さんが僕に言った。

「もともと久高島には、琉球王朝の〈ノロ制度〉は無かったものですから。はい……。ユタ的な〈ハミー〉（守り神）と、ノロ的な〈ウマリングワァー〉（生まれ神）だけがあったという証拠です」
まさに自然の流れの中で、いのちを生んで育むという、「母性性」が再生する追加、新たに拓かれようとしていた。」 P 2 7 0～1

「ムトゥヤ制」が根源的なものかどうかは、私にはわからない。王府支配以前からあったことは確かだ。人々を支配する時、人々の「こころ」に強い影響を及ぼすものに支配側が着目し、その支配管理を行ったことは、支配の歴史ではごく普通のことである。近代以降では、信仰・宗教以上に

教育が使われるようになってきた。

首里王府以前については、さらなる調査研究が必要だろう。そうしたものが、どういう形で人々の生活・こころの底流に存在していたのか、研究の進展が待たれる。それにしても、そうしたものにも、時代の社会構造のなかで変化がある。支配、ないしは人々の人間関係のありようとの複雑な絡み合いのなかにある。よくいわれる「根源的」な形を解明しようとするよりも、変化のなかでとらえる方がより正確であろう。

そうした意味では、ひるがえって、現代の人々の生活・人間関係・心の中にふさわしいものを、どう創り出すのか、という課題も存在する。

女が神事（祭り事）、男が政事（政治）を担当するという分業があったということが、多くの書籍で言われている。しかし、それさえも、その時代・地域の支配的な発想ではなかったか、と疑う必要あるのではなかろうか。そのことで、女を政治から引き離し、男を祭りごとから引き離す意図があったのではないか、という推理さえあってよいだろう。

久高に関しても、その分業に似た言い方が広く行われてきた。だが、本書では、男の祭祀について書かれている。注目したい。

「なかでも、一二年に一度行われてきたイザイホー儀礼は、多くの研究者の関心を集めた。これは、久高島に新たな神女を誕生させる儀式であった。これまで総じて、久高島の研究は、こうした女性を中心とした祭祀が注目されてきたように思われる。

しかし、年中行事を丹念に見ていくと、久高島の男の祭祀には逞しさがあり、海人（ウミンチュ）の息吹が感じられることに気づく。こうした海人に支えられた背景があって、女性の祭祀組織は年齢階梯に準じて機能していたのである。

久高島の外の世界で、漁撈や交易を研究している人たちも、たびたび島の調査に訪れている。この島の海人が、琉球弧の漁撈に与えた影響が、次第に明らかになりつつある。確かに、久高には、伝統漁法「アンティキヤー」や、多くの優秀な海人を生み出すシステムが残っていた。

島人が、島外との交流をすることで、常に新たな世界観を生みだしてきた歴史は、久高島の未来に大きな可能性をもたらしている。（中略）

海人の歴史という時間軸をさかのぼると、久高島から糸満、与那国までの航跡が浮かび上がってくる。また、海人の足跡を追うことで空間軸を見つけ出し、久高人（クダカンチュ）はどこまで行ったか……というテーマを、映像化しなければならない。果たして、久高島の海人の交易圏はど

ここまで広がっていたのであろうか。」 p 16～17

「久高島の海人は、琉球王国時代以前から、「原日本人」として南北に広い海域で活動した。北はトカラ列島の宝島や屋久島まで、南は先島地方から台湾の東海岸にいたるまで、漁撈や交易活動を行っていたのだった。

久高の海人は糸満漁民とともに、その名はひろく知れわたっていた。追い込み漁の「アンティキヤー」や「イラブー漁」などの漁法は、高い技術に裏打ちされたものであった。特に王朝時代の末期には、唐船や楷船、飛船の乗組員として活躍したことは、文献のみならず、今日にいたるまで、島人の中でも連綿と語り伝えられてきたのである。」 P 18

久高における現代の「島おこし」的なことが書かれている箇所もある。

現代の島おこし、島人の生活とかかわった、島人の祭祀・こころの探求を追う本書ならびに映画は注目されよう。

知念グスク

知念地域には、聖地が多い。まず知念グスクだ。復元というか、修復というか、工事が時間をかけて進行中だ。ここでは、知念グスクからの景観を紹介しよう。

右は、南西方向のアージ島と藪薩御嶽を写した。写真のやや下方の海岸付近に見える。



左の写真は、南方向だ。

新旧のグスクがあるが、右は古いほうの森だ。ここは、齋場御嶽と対照的に観光客はいず、静寂で、スピリチュアルな雰囲気そのものだ。



齋場御嶽

齋場御嶽には、年に1回ぐらい訪問する。

最初の訪問は、30年近く前。当時は、草木が生い茂り、怖さを感じるほどだった。狭い岩の間を抜けるのをやめようかと思ったほどだ。

その時は、他の来訪者もいず、静けさそのものだった。近年では、世界遺産に指定されたこともあり、整備が行きとどき、観光客が殺到している。



斎場御嶽には、いくつかのスポットがあるが、そのなかで、観光客がほとんど行かず、ほぼ地元の御願する人だけが祈る場としてウローカーがある。斎場御嶽に入る前の禊ぎの場所だ。

がんじゅう駅から国道を下り、サンサンビーチ入り口近くを左に入ってすぐ。



知念岬からの景観

左は中部の景観だ。

写真ではかすかにしか写っていないが、

右から津堅、浜比嘉、平安座・宮城、勝連

右は、同じ場所から久高・コマカ島を見た。

ここからは、東南方向、北東方向双方が見事に見える。しかし、意外に知られていないので、訪れる人は少ない。だから、遮るもののない広い場で静かに景観を味わうのに絶好。



左は、藪薩や百名方向を写したもの。



上は、移転前のコマカ歯科の窓から見えるコマカ島。歯科はすぐ近くに移転したが、現在の歯科からは津堅や久高がよく見える。

志喜屋

志喜屋は、知念のなかで、玉城に接する地点にある。戦後米軍占領開始の一時期、住民収容施設や行政施設などがおかれたことがある。

港の西側には広場があり、ビーチも奇麗に整備されている。ビーチを囲むように「岬風」のものが作られている。写真は、そこからとった。中央海岸がビーチだ。



西方向。藪薩の丘。
突端はアージ島。やや
右側が、下田の集落。
その上が百名・仲村渠
になる。



下は、北側を写した写真。仲村渠、垣花、志喜屋の丘だ。隆起した海岸段丘の姿がよくわかる。
仲村渠、垣花の樋川がこれらの「中腹」にある。



右は、志喜屋漁港への進入路。正面はアドキ島。埋め立てで陸続きとなったが、まだ行ったことはない。

近くには定置網、漁船も見えた。



志喜屋の集落の中に、鍛冶の始祖の碑がある。

沖縄の歴史から考えて、このあたりに鍛冶の始祖があるのもうなずける。

もう一カ所、別のところにも、始祖の記念碑があるとのことだ。

d. 大里城跡・佐敷上グスク・ 馬天御嶽

大里城跡

玉城・知念の聖地・旧跡はしばしば訪問したが、大里地域。佐敷地域に出かける機会はほとんどなかった。しかし、少しずつ学ぶ中で、この地域にも重要な聖地・遺跡があることを知る。たとえば、島添大里グスク、稲福遺跡群、場天御嶽周辺、佐敷上グスク。

いずれも、14, 15世紀の沖縄史にとっても重要な場だ。13世紀以前もそうだったと思うが。

この時期、南城市を構成する4つの地域には、有力な実力者がいて、地域覇権をめぐるのせめぎあいがあり、城塞化したグスクも多い。

遺跡の多くは、この実力者を中心にして話題化されている。だが、人々の生活・生産のストーリーがあって、これらの実力者たちがいるのだ。しかし、そのあたりは物語化されず、もっぱら実力者たちの物語ばかりが、継承されている。

この時代は、沖縄社会が実に豊かに展開する時代だ。そのなかにあって、南城四地域は際立つ地域だ。そうした角度から、歴史と物語の再構成が求められているのではないだろうか。



前ページ写真

は大里公園。島添大里グスクだ。

重要な遺跡のわりには、復元工事とかはそれほど進んでいる感じではない。

一番高い所に行くと、見晴らし



がいい。やはり要所という感じがする。(上の写真)

近くで一番高いのは、写真中央の運玉森だ。かつて西原に住んでいたころ、よく登った。山登りそのものは15分ぐらいだが、山登りという感じになる。別称西原富士というのも、うなずける。

山の手前は南風原。山の向こうは、西原や琉球大学方向だ。

大里城址の見晴らしの良さは、東シナ海も太平洋も見渡せることからわかる。

右の写真は東シナ海方向で、うっすらとしか見えない慶良間だが、肉眼ではよく見える。手前の市街地は、那覇。





左は、中城湾方向。
ここから各地を見ながら、島添大里グスクの人々は何を考えていたのだろうか。

大里城址の北側には大里内原公園がある。スポーツ施設・アスレチック施設などが整っている。大きな滑り台もある。遊んでいる小さな子どもに促されて10～20年ぶりにすべってみた。

写真は、この公園の光景。かなり広いので、一部しか写っていない。



後ろの左側の高いところが島添大里城址。中央方向が大里中心部



公園には一本だけ美しく咲いている桜があった。



佐敷上グシク

伊平屋から来て、佐敷を拠点にして、首里で統一王権をとった尚思紹・尚巴志父子の物語の場だ。

東御廻りの一つ。

下の写真は、佐敷上グシクの御嶽上グスクの一番奥にある

上グスクには、石垣は見つかっていないという。ここは、恐らく軍事的に意味合いが少ないところだろう。

私の推理。今は、樹木に覆われて、見晴らしが良くないが、木を切れば、佐敷の平地が見渡せる場所だ。14世紀末、そこには豊穡な水田が広がっていたのだろう。その農地を見晴らし、農業を管理するには、絶好の地だろう。ここで力を蓄えた尚巴志が首里にのぼっていったのではないか。





佐敷上グスクの広場には立派な相思樹がある

場天御嶽

ここも東御廻りの一つ。

以前にあった場所が、がけ崩れのため、ここに引っ越したとのこと。もともとは、地元の御嶽。

なかなか厳かな御嶽だ。

県道の新里ビラのすぐ近くだ。

